
神話

きぬは

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神話

【Nコード】

N7602H

【作者名】

きぬは

【あらすじ】

【東方二次創作】神奈子と諏訪子のお話

（前書き）

二次創作というところをご理解ください。

雨上がり。

屋根にたまった水滴が、雫となって水溜りにポツリと落ちる。

波紋は広がり、一つの大きな円を描く。

「それじゃあ、いってきます神奈子様、諏訪子様」

冬の澄み切った空の下、玄関先で白い息が漏れる。

「あゝ、いつてらっしゃい……」

腕を組むわけではないが、まだ肌寒い気候のせいかな両手をもう片方の袖に

隠しながら、眠そうな声で挨拶を返す神奈子。

「いつてらっしゃい」

一方、まさか千年以上生きているとは思えないほど、無垢な笑顔で大きく手を振る諏訪子。

二人の視界から早苗はどんどん小さくなっていき、やがて見えなくなる。

早苗の姿が見えなくなるや否や

神奈子は寒さを運ぶ玄関を閉め、冬眠から無理矢理起こされた蛇のごとく

視線を送る。

「で、今日は早苗、どこに行ったんだい？」

「聞いてなかったの？」

「ああ」

そつ頭をかきながら神奈子は茶の間に足を運び、コタツへと潜り込む。

諏訪子の方はお茶を入れるため台所へと向かいながら、神奈子のフランクさに

あきれた口調で答える。

「確か……今日はあの黒白と、幻想郷を探検するとか言ってたかな」

「へえ」

一向にやる気のない返事。

季節が違えば五月病といったところなのだろうか。少々その態度にム力つきながらも、

諏訪子は尋ねる。

「二度寝するの?」

「いや、今日は起きるわ」

目は冬眠から無理矢理起こされた蛇そのものなの、瞼が瞳に暗幕を張っているのに、

どうやら起きるらしい。

「ってことで私のお茶もお願いね」

神奈子はそう自分の意見だけ述べると、答えも聞かずにコタツに身を預けるようにして

だれこむのだった。

一方、諏訪子はそんなだらしのない神奈子を横目に準備を始める。

湯気の上がったヤカンをお茶葉の入った急須に注ぐ。

茶葉が一斉に広がり、仄かにお茶の香りが漂う。

そこから二人分の湯のみに注ぐ。本当なら半分注いで、もう片方に半分注いで

それからもう一度、注ぐのだが、気の知れた者同士なのでその手前は省き、

ただただ、8分目まで注ぎ、それが終るともう一つの湯のみに8分目まで注ぐ。

冬にはもってこいの熱いお茶の出来上がりだ。

諏訪子はその小さな両手に二つの湯のみを抱えながら

「はいっ」

とちゃぶ台にガツンと置く。

もう一人の神はお茶を受け取ると、お礼も言わず、お茶も啜らず、早々、コタツへ深々ともぐり込む。

諏訪子もそれにつられてか、一步遅れて同じ動作を繰り返す。

いつもは三人の守矢神社、でも今日は二人。

早苗がいるときは、いつも取り合いのように、蛇と蛙の熱き死闘を繰り広げる二人も

早苗がいなければ、別に争う理由も無い。

もう国取り合戦も当の昔に終わったのだから。

つかの間の静寂が守矢家に訪れる。

しかし、このままではお話が成り立たない。

そんな静寂を破ったのは、夏からつけっぱなしの風鈴。

「冬でもいい音が鳴るんだね」

「へえ、そうなのか」

神奈子のやる気のないというよりは聞く気のない態度に頬を膨らませる諏訪子。

しかしそんなことにいちいち腹を立てるわけにもいかないので、気分転換にお茶を啜る。

それでも自分の目の前にいるのは、やる気のない神様と彼女の湯のみ。

なかなかイライラが消え去らない。なるべく神奈子を見ないように、彼女の湯のみを

見つめていると、そこには諏訪子にとっての大発見があった。

彼女は真ん丸、御眼目をもう一段階大きくして声を漏らす。

「あつ、神奈子のお茶、茶柱立ってるじゃん!？」

彼女の言うとおり、小さいながらも、茶渋がしっかりと湯のみの底に足をつけていた。

「これってすごいことだね。神奈子!!」

しかしそれに対しての返答はない。

神奈子を見ても、ただポカンとどこか遠くを見つめているだけだ。

これに対して、ついに我慢していた何かが、諏訪子の中でプチンと弾けた。

「ねえ、その死んだ魚みたいな目やめてくれるかな？ 一応私たちは神様だよ」

それでもそんな彼女にほとんど興味を示すことなく

やっとお茶を啜り、静かに、いやどちらかと言うとやる気がなさそうに神奈子は答える。

「そうかもね」

言葉は目、同様死んでいる。

「あんたが、神様とか言うの珍しいじゃん？ 普段は私がいいそうなのに」

「確かにそうだけど……それでも今のあんた見てるところにまで、その死人才ーラが

うつりそうで嫌なの!!」

「そりゃあ、わるうござんした」

神奈子は体から、さらに力を抜くように、下半身のみならず、上半身も畳に預ける。

諏訪子からは怒る依然に、普段とは打って変った神に、もはや溜息混じりの声しか出ない。

「で……原因は早苗でしょ？」

神奈子の背筋がピクンと脈を打つ。効果音がつくなら「ギクッ」が適当だろう。

「さ〜ね」

「ごまかしてもだめ。早苗が私たち以外の子と遊びに出かけるといつも

そうなるもん!!」

神奈子はその質問に答えることなく、目を瞑るだけ。

やがて、彼女からはスースーと心地のよさそうな寝息が聞こえ出す。

その間、諏訪子は彼女を起こすのも面倒なので、ちゃぶ台に置いてあった蜜柑に

手をつけるのだった。

神奈子が寝てから何時間が経ったのだろう。

とりあえず、蜜柑のヒトデ型の皮が五枚ほど、ちゃぶ台に並ぶ頃

神奈子の目がパツと開いた。唐突の質問とともに。

「ねえ諏訪子、あんたは……早苗のことどう思っ？」

「起きたんだ。そういう神奈子はどう思っのよ？」

「何を早々に」と思いつつも

悪戯そうな目つきですぐさま質問を質問で返す。

決して先ほどの愚弄の数々を忘れたというわけではないようだ。

「で、神奈子さんはどう思っんですか？」

諏訪子はさらに質問を繰り返す。

神奈子は質問しているのは自分なのと思いながら、仕方なさそうにしぶしぶ答える。

「私は……正直なところ……自分でもわからないんだ」

「どういうことよ？」

諏訪子は興味深そうに、寝転がる神奈子の顔を覗き込む。

神奈子は目を合わせようとせず、背を諏訪子に向けるように寝返

りをうつ。

「とにかく、早苗がいなくなると怖くなるんだよ」

その声は風鈴の音にもかき消されそうな程小さかった。

しかし、その一言は諏訪子の目を輝かせるのだった。

「それは恋ってやつだよ！！恋に違いない！！」

神奈子は起き上がり、明らかに侮蔑まじり、理解不能といった目つきで目の前の諏訪子を捉える。

「なんですぐそうなるのかな。それに早苗は私専用の巫女で、私は神なんだから……」

恋とかはご法度だろ」

そんな彼女に鋭い口調が突き刺す。

「だから……恋はありえないっていうの？」

「ああ、私と早苗の関係は祭るものと、祭られるもの。結ばれちゃいけないだろ」

「誰が決めたの？」

「いや……」

神奈子の言葉が詰まる。

「それは逃げだよね。自分が神様ってことを言い訳にしてごまかしてるだけだよね!!」

そう言葉を吐き捨てながら、諏訪子はちやぶ台を思い切り叩く。

それについては何か思うことがあったのか神奈子も体勢を整え、ちやぶ台に足を乗せ、

「そういつあんたはどうなんだよ!!」

と鋭い視線で諏訪子を見下す。

しかし彼女がそんなことで怯むわけもなく、言葉は神奈子のときとは対象的に

すぐさま発せられる。

「私は好きだよ。早苗のことが大好きだよ！ 愛しているよ!」

二人の神が対峙する。その瞳は彼女たちが初めて対峙した戦争のときよりも

明らかに激しいものだった。なんでここまで問題が発展してしまったかはわからない。

ただここに、いつも止めてくれる早苗は今いない。

「へえゝあんたこそ、思いを伝えられないままじゃないかい？

それでよく私に言い切れたね!!」

神奈子は諏訪子の襟を軽々と掴み上げる。まるで蛇が蛙を食らうように。

神奈子の勢いはもう止められない。彼女自身もそう思った。

しかし次の瞬間、そんな血管も筋繊維も浮き上がる腕に

一滴の雫が流れる。まさしく諏訪子の涙、神奈子でさえ初めて見る諏訪子の涙、

それは国を侵略するときさえも流れることなかった涙だった。

つい、握り締めた力が弱まる。

「あんた……」

「わだじは……どんだに早苗がすきでも……血縁者だから、結ばれちゃいけないんだよ……」

諏訪子の言うように、早苗は諏訪子の遠い子孫だ。血が薄れたからといっても早苗の奇跡を起こす

能力が今なお、強い血の絆を示す。そしてそれこそが、諏訪子と早苗を結ばせない。

どんなに愛していようと、体の、心のどこかで罪悪が生まれる。そして罪悪はいつか

諏訪子を壊す。それは諏訪子の古くから生きてきた神としての経験が物語る。

神々は幾度となく血の絆で結ばれてきた人類の末路を見てきた。

それはとある小説家の妹であつたり、はたまた歴史上に名を残す貴族であつたりと

さまざまな人々。絆を乗り越えようし、もだえた拳句、壊れていった人々だ。

それを思うと乗り越えられない。

神奈子は全て悟つたように、ゆっくりと諏訪子を畳へとおろす。

諏訪子はよれよれになった襟を手で叩き、涙を拭っている。

その間、神奈子は早苗という子孫は諏訪子が洩矢の国を治めていた際に、彼女が愛した

人物と酷似していたのかもしれないと思いながら、諏訪子を可哀想に見つめていた。

やがてだらだらと涙を流してた諏訪も涙を拭い終わる。

彼女はそこで神奈子を見つめ返す。

その健気そうな姿に、神奈子は何か励ましの言葉でもかけてやろうと口を開こうとした瞬間。

「で、神奈子はどうなの？」

諏訪子の唇が先に動いた。思った以上にケロっとしているのに神奈子は

突っ込みを入れたくなっただが、彼女の瞳の真剣さと

諏訪子の切実な気持ちを知ってしまったという思いから、素直に答えざるを得ない。

「私は……本当にわからないんだ」

それは今までで一番ハキのない声だった。

そのとき神奈子は、また諏訪子の眼の他に、帽子さえも自分を睨み付けているように感じた。

それでも神奈子は言葉を続ける。自分に正直に語ってくれた諏訪子のために自分の気持ちを

理解してもらうためにも。

「私は、神として生きてきた」

確かに神奈子は諏訪子とは異なり確かに子孫も残すことなく神という立場で生きてきた身だ。

「だから恋という感情がよくわからない。でも早苗が私から離れていくことがすごい怖いんだ。

それを人は恋というのかも知れない。でも……私の場合は少し違うと思う」

諏訪子の侮蔑の表情が少しばかり緩やかになる。

「私は人々の信仰を一度失った神だ。そんな中、私を生かし、支えとなったのは言うまでも

ない早苗だ。だから……早苗もいつか他の人たちと同じように私の元を離れ、忘れてしまふんじゃない

ないかと思うと怖くて仕方ない。これが私の気持ちだ」

嘘偽りのない、一度人から見捨てられた神の気持ち。

「そっかぁ。神奈子もてっきり私と同じと思ってたんだけどな」

ZUN帽を深くかぶりながら諏訪子はそう口にした。

そしてどこを見るでもなく、しいて言えばどこか遠くを見るようにして言葉を続けた。

「なら、安心だよ。早苗は絶対に忘れたりしない。それに神奈子も私もこれから

もっといっぱい楽しくなる」

神奈子の頭には「？」の一字が浮かぶ。

諏訪子はそんな神奈子に満面の笑みをつくる。

「きつと早苗が誰か、私たちじゃない例えばあの白黒を好きになつて結婚しても……」

早苗はここで暮らす。そしたら、あの白黒もここで住んで、4人暮らし。でもって

年を重ねるにつれて、早苗はあの白黒の怪しい薬品とかで子供とかも生んじやつたりして

また、家族が増えるの。もちろん私や神奈子の自由な時間も減っていく。なんか子供のおしめとか

世話とか押し付けられたりしてね。で、さらにその子が誰かと結婚して子供を生む。

その子はもう神社じゃぎゅうぎゅうだから別の家で暮らす。それでも暇な私たちは

呼び出され、何かとその赤ちゃんの世話をしたりする。

なんたつて私たちは神だから年もとらないしね。本当毎日が忙しくなっていくはずだよ。

でも、でも、それなのに私たちはどんどん幸せになっていくんだ。早苗の幸せが私たちの

幸せにもなつて、その幸せは連鎖していくんだよきつと」

「それじゃあ、諏訪子……あんたの恋路は……」

言うつもりはなかった。しかし気づいたらそう口にしていた。

「好きな人と結ばれることだけが幸せとは限らないだよ。私たちは神として

多くの人間を見てきた。全ての人間が自分の一番好きな人と結ばれてこなかったことも

見てきた。でも……そうじゃなくても、人は笑っていたでしょ。だから今日のことは

二人だけの秘密なのだー」

諏訪子は帽子をはずし、神奈子を安心させるようにもう一度大きな笑顔を見せた。

諏訪子は自国が侵略された際も毅然な態度を崩さなかった。

侵略したは、いいが信仰を集められなく悩んでいた神奈子に

何も文句もたれることなく諏訪子は手をかしてくれた神でもある。

だから。

「本当に強い子だね」

神奈子は遠い昔の出来事をそして今、この一瞬、一秒を思いながら、そう小さく呟くのだった。

「今なんか言った？」

本当は聞こえているだろうに、諏訪子はわざとらしく頭を神奈子のKENZENな胸に擦り付ける。

「何でもないから、急にくつつくんじゃないよ」

「いいじゃん別に」

そんな二人のやり取りの最中、玄関が再び開く。

「ただいま戻りました。少し、遅くなってしまいましたね。申し訳ありません。」

「今から晩御飯の支度しますから」

その声の主はもちろん早苗。まだ外はうつすらな赤紫で、そこまで暗くはないのに律儀な娘である。

その間も諏訪子は神奈子にじゃれつきっぱなし。早苗はそんな仲の良い二人を

微笑ましく思いながら、おかつてに向かい夕食の準備を始める。

野菜が俎板の上で淡々とメロディを奏でます。同時に早苗の口も動き出す。

「ところで、明日の夜、博麗神社で宴会を催すそうなんですけど……」

二人の手が不意に止まる。

「そうか……それなら、明日は楽しんできなよ、早苗」

どこかぎこちない声の神奈子の声だけが守矢家に響いた。

それで、早苗からの「ありがとうございます。明日も楽しんできますね」で終わり。

少なくともそうだと神奈子は確信していた。

しかし

「何を言ってるんですか！？二人も行くんです！！」

「へえ？」

「やつほゝ皆で楽しくお酒が飲めるってことだね」

疑問符を吐き出すのはやはり神奈子で、酒盛りに感嘆の声を漏らすのは諏訪子。

「だって神奈子様も諏訪子様も、妖怪の山はよく知っていても、まだ幻想郷の

妖精や吸血鬼さんには会ってませんよね。今回は私たちの親睦も兼

ねてるんで

主役の二人がかけちゃいけません!！」

いつも以上に生真面目な早苗の表情。

神奈子からもつい笑みが漏れる。

「どうなさいたか？神奈子様？」

てつきり自分は幻想郷でも、いずれ早苗に見捨てられ、取り残されてしまう時が

やってくるのかと心どこかで思った。そう昔、人々から信仰を失ったように。

でもどうやら、それはまだまだ当分先、いやこないかもしれない。

今は早苗とともに、いやこの幻想郷とともに歩いていく道があるのかもしれない。

今ならさっきの諏訪子の言葉の意味が少しわかる気がした。

幸せが連鎖する。それは雨上がり、

屋根にたまった水滴が、雫となって水溜りに描かれる波紋に近いものかもしれない。

そんなことを思い、縁側にまだ残っている水溜りに落ちる水滴を眺めながら神奈子は

「いや何でもないよ……」

とだけ穏やかな口調で答えるのだった。

（後書き）

話の展開、諏訪子と神奈子の設定が一応公式設定？の部分も考慮しながらやったつもりですが

若干ムリやり感があつたような気がします。実はその1の前に0みたいなのも書いて神奈子と諏訪子

の過去話を書いたには書いたんですが、諏訪子があまりにも悲しくなつたし、あんまり個人の過去話を

押し付けるのもよくないのかな？とそして内容的にも本編と矛盾と
いうか混乱を招く箇所に気づいたので

カットしました。まあそんなこんなです。早苗さんに、あんまり深く言及してないのも別に手抜きではなかつ

たりしますよ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7602h/>

神話

2010年10月28日05時12分発行